

「本土決戦 日本の国力は…」

平成23年6月4日 高根台公民館

沖繩の戦いが絶望的になってきた昭和二十年六月になると、「一億特攻」、こんな活字が新聞紙面に躍るようになりました。陸軍はすでに四月二十日、「皇土決戦訓」を全軍に布告して、「本土決戦」を声高に唱えるようになっていました。いま「皇土」なんて聞いても、何のことか首をかしげる方もいらっしゃると思いますが、国土、日本本土のことで、皇国とか皇軍とか、何でも天皇の「皇」の字をつけて、重みを持たせようとした時代でした。「皇土決戦訓」では「体当り精神に徹し、一億戦友の先駆たるべし」としていますが、国民もこれに呼応して、米軍が上陸して来たら、一人一人が特攻精神で敵と刺し違えようと言うのです。考えれば、国民スローガンは「一億一心」に始まり、それが「一億総動員」となり、「一億特攻」から「一億玉碎」へとつながっていくわけですが、多くの国民もこの頃には、米軍の本土上陸が間もなく現実のものになることを覚悟していました。

陸軍に本土決戦思想が生まれたのは、正しく言えば、「もうこれしかない」と言うところまで追い詰められたのは、フィリピンの「レイテ決戦」に敗れてからでした。大本営は昭和十九年十二月十九日、「レイテ決戦放棄」を決定しましたが、参謀本部戦争指導班長の種村佐孝大佐は、「大本営機密日誌」にこう書いています。「こうなった以上、今後の戦争指導上和戦の転機を何れに求むべきか、大本営として作戦の重点を何れに指向すべきか、は重大なる問題となって来た。ここに本土決戦思想が擡頭するに至った」と。そして年が明けた二十年一月十九日、大本営は日本の軍事史上では初めて、陸海軍同一の本土決戦作戦計画を策定したのです。決戦の頭文字から「決号作戦」と名付けていますが、決戦準備の重点は九州と関東平野とし、米軍の本土来攻を秋以降と判断、八月を目標に決戦態勢を整えることになりました。

そうは言っても、陸軍兵力はほとんど南方と中国戦線に出払っていて、本土にはわずかに八個師団と戦車一個師団しかないのです。そこで、新たに四十個師団以上を編成して、本土決戦用に配備するというのですが、容易なことではありません。開戦時五十一個師団、二百二十七万の兵力でスタートした陸軍でしたが、戦局の悪化と共にどんどん膨れ上がり、動員のための施策はほとんど出尽くしていたと言ってもいいでしょう。昭和十八年十一月に兵役法を改正、兵役最終年齢を五年延長して四十五歳にしましたし、翌月には満二十歳の徴兵年齢も一年繰り

上げて十九歳です。朝鮮や台湾の徴兵制も実施しましたし、十九年年末の動員軍人総数は五百三十七万人。町や村には、もう老人と女、子供しか残っていないのです。

この新規大動員をめぐる、陸軍省と参謀本部の間で激論になりました。「大本営機密日誌」には、「このように内地兵備は未曾有の規模をもって大膨張しようとしている。兵員はいよいよ質が低下するであろうし、さらにこれに要する装備はどうなるか。実に十二、三歳の少女に子供を産めというに等しい難問題であった」とあります。陸軍省側が「兵備は数の多いのが良いのか、少数でも充実したものが良いのか」と質せば、参謀本部作戦部長の宮崎周一中将は「質より数を尚ぶ」。参謀次長の秦彦三郎中将も「本土上陸の第一波撃摧に失敗したら、その後の計画は不可能だ。従って持久戦はできぬ、絶対後のことは考えぬ。まず第一波撃摧に全力を傾注する」と答えます。とにかく上陸予想地点は、九州と関東だけでなく、鹿児島島の志布志湾、吹上浜、宮崎海岸、相模灘に九十九里浜、鹿島灘といっぱいありますし、そこに兵隊も張り付けなければなりません。大本営は二月二十六日、百五十万の「根こそぎ動員」実施を決定したのです。米軍はこの十九日、硫黄島に上陸して来ていましたが、種村大佐は「大本営機密日誌」に「この夜硫黄島に血戦続き、内地には雪霏々として降る。二・二六当時の悲壮さを思わしめた」と書いています。

大本営は、本土決戦態勢の整備を急ぎました。まず三月二十九日、陸軍の召集規則を改正して、唯一残っていた動員源である満十七、八歳の全ての男子の防衛召集を可能にしたのです。四月七日には東日本に第一総軍、西日本に第二総軍、また航空部隊を統一指揮するため航空総軍を創設し、戦艦「大和」が沖繩特攻で撃沈されて壊滅状態になっていた海軍も、二十五日、海軍総隊司令部を置いて全作戦部隊を指揮することにしました。しかし、いくら指揮系統を整え、質よりは数だとは言っても、本土決戦に必要なのは兵隊だけではありません。上陸予想地点に壕を掘らなければなりませんし、地上施設も地下に移さなければなりません。

小磯国昭内閣は、このため、国民の「総軍隊化」を進めていったのです。その第一弾として、三月十八日の臨時閣議で「決戦教育措置要綱」を決定しました。

「現下緊迫せる事態に即応するため、学徒をして国民防衛の一翼たらしむるとともに、真摯生活の中核たらしむる」。こんな理屈を並べてはいますが、要するに学生を本土決戦に必要な業務に総動員するため、学校の授業は国民学校初等科を除いて四月一日から一年間、原則として停止したのです。ついで三月二十三日には、「国民義勇隊組織法案」が閣議決定され、翌日、内閣情報局からその内容が発表されました。これは、国民男女を職場単位、地域単位に編成して、防空、防衛、空襲被害の復旧から、疎開輸送、食糧増産、こういつたもののほか陣地構築や補給輸送など、それこそ軍のあらゆる作戦行動に協力させ、しかも「状勢急迫

セル場合ハ武器ヲ執ツテ蹶起スル」。つまり、国民の全エネルギーを、本土決戦に強制的に投入しようというものでした。そして小磯内閣が総辞職し、四月七日に鈴木貫太郎内閣が成立すると、十三日には「国民義勇隊組織ニ関スル件」、「状況急迫セル場合ハ必要地域ノ国民義勇隊ヲ戦闘隊ニ移動サセルコト」。この二件が閣議決定され、十五歳以上六十歳までの男子、十七歳以上四十歳までの女子はみんな、いつでも戦闘に狩り出されることになったのです。

この頃の新聞広告に「此ノ戦局!!一億憤激シテ武器ヲ執レバ勝利ハ我ニ在リ」。こんな日本軍刀工業会社の広告が出ています。いかにも「軍刀を買え」と言わんばかりですが、事実、いくら兵隊を召集しても、もう満足に小銃も渡せない状態になっていたのです。狩猟家が持っていた猟銃なんかも、もうとつくに供出させられていましたし、私が勤労働員先から中学校に寄った時、びっくりしたのは、軍事教練で使っていた三八式歩兵銃が一挺もないのです。「兵隊が来て、みんな持っていった」と言うのですが、正直いって「こんな明治三十八年頃の鉄砲で戦うのかよ」と思ったものでした。そして、中学校や在郷軍人会にあった三八式を全部掻き集めても、二百人の兵隊がいて、兵営には小銃が十挺だけなんて話はザラだった、と言われていきます。

ですから、いくら各地に国民義勇隊を編成したとしても、隊員に渡す武器なんて、ろくにあるはずありません。鈴木内閣書記官長の迫水久常の話だと、陸軍省から義勇隊に使用させる兵器が展示してあるから見てほしいとのこと、鈴木首相を先頭に見に行ったんだそうです。ところが、とても兵器とは言えないような、原始的な代物ばかり。「手榴弾はまずよいとして、銃というのは単発であって、銃の筒先から、まず火薬を包んだ小さな袋を棒で押し込み、その上に鉄の丸棒を輪切りにした弾丸を棒で押しこんで射撃する。それに日本在来の弓が展示してあって、麗々しく射程距離おおむね三、四十米、通常射手における命中率五〇%と書いてある。その他は文字どおり竹槍であり、昔ながらのさす叉である」——今「さす叉」なんて聞いても、若い人には何のことか分からないかも知れませんが、江戸時代、罪人を捕まえるのに使ったもので、鈴木首相も思わず「これはひどい」と呟いたと言います。

陸軍は、この頃には「国民抗戦必携」というパンフレットを作って、一般に配布していました。米軍が上陸して来たら、「銃、剣はもちろん、刀、槍、竹槍から鎌、ナタ、玄能、出刃包丁、鳶口に至るまで、これを白兵戦闘兵器として用いる」と言うのです。どういう使い方をしたら効果的かを説明し、「断じて屈せざる気魄のあるところ、戦いは必ず勝つ」。こんな精神主義で結んでいます。最新式兵器の米軍には、全く絶望的な一億玉砕戦法でした。

元首相の若槻礼次郎も回顧録に、「今度は内地で本土決戦をするという。本土決戦というのは、内地を焦土とするだけの話で、そんな馬鹿なことはない」と書

いています。疎開先の伊東から上京するたびに、護衛についてくる神奈川県巡査の話では、警察署が焼けてせっかく集めた三百挺の猟銃も焼けて困っている。近くの床屋は、毎朝早起きして広場で竹槍の稽古。「本土決戦ですから、竹槍をもつて戦う」と言うのですが、若槻は「まことに正気の沙汰とは思えない。大砲、機関銃や、戦車、飛行機に向かつて、猟銃や竹槍で対抗しようとするのは、いわゆる螻蛄の、これはカマキリのことですが、竜車に向かうの類である。休戦はもはや焦眉の急といわなければならぬ」。本当に、その通りでした。

しかも、足りないのは兵隊と兵器だけでなく、第一、食べるものがなくなっていたのです。連日連夜の空襲、関門海峡や港湾には機雷が投下され、日本海にまで潜水艦が入り込んで来ています。完全に封鎖された日本列島で、飢えとの戦いが本格的に始まったのです。配給米の中で、お米の占める比率が急減してしまいました。昭和二十年六月には五一%だったのが、七月に四二%と落ち、代わって大豆が五月までは数%だったのに、六月二三%、七月には四五%と半分近くです。作詞家の添田知道、この人は「ラッパ節」で有名な演歌師添田唾蟬坊の長男ですが、五月十九日の日記に「何しろ豆粕ばかりに見えるご飯である」と嘆いています。郵便を出そうとして、「お櫃を覗き込んでよく探さないと、飯粒のつもりで塗っていても、豆粕なので切手が一向に貼れない」と言うのです。

とにかく、お腹が空いていました。「戦争中、何が一番辛かったか」と聞かれれば、私の場合、情けないことに空腹でした。大体が米の国内生産量は、開戦前の昭和十六年でも六千八十七万石、消費量の七千三百三十七万石には一千万石以上も足りないのです。朝鮮、台湾など外地に頼っていたのが、日本列島が封鎖されては、国民が飢えるのも当然でした。学校の校庭や空き地は畑に変わっていきましたが、カボチャが食べられなければいい方で、そのツルまで食べました。食糧の大幅減配をしなければならなくなり、農商務大臣の石黒忠篤は閣議で「発表はなるべく早い方がいい。これでは生きて行けぬ、との世論が起こり、戦争をやめる世論になつてもいいではないか。食糧が不足して戦争をやめねばならぬ、ということとを食糧主管大臣が言い、戦争をやめることになつた責任を私がとることにしてもしよい。軍はまだ勝つ見込みがあつたんだが、食糧がなくなつたので戦争をやめるということにすれば、軍の面目は立つ。悪いのは食糧主管大臣ということにすればよい」。こうまで言つたんだそうですが、「沖縄戦がすむまでは、戦意を喪失させるからいけない」ということで、結局沖縄戦の終わつた七月三日、閣議決定で主食の配給量を一割減、十一日から一人一日二合一勺にしました。六大都市だけは八月十一日まで一か月延ばしましたが、それも雑穀まじりのうえ、空襲による配給機構のマヒで、配給そのものが遅れがちになつたのです。

「空襲ヲ受ケルコトハ皆ノ本当ノ商売ノ様ニナツタ、ナイトソノ合間ニ感情ノモツレガ露骨ニナル、アルトソレガ消滅スル、戦争ノツツク限り、適当ナ空襲ガ

必要トナツテシマッタ」。日記にこんなことを書いているのは、映画評論家の植草甚一です。東京の市街地は三月十日の大空襲に続いて、五月二十四日、二十五日の連続空襲で半分以上、八十五万戸が焼失していました。私が小石川で焼け出されたのは二十五日でしたが、妙なもので、何となくみんなと一緒になったという、奇妙な連帯感が生まれて来るのです。喜劇役者のエノケンは二十四日の被災者でしたが、大きなシエパードを飼っていて、小柄な人でしたから、その犬小屋にベッドを置いて寝起きしたんだそうです。そこから高座へ通って、開口一番、「もうすみました」。観客はみんな、大笑いしたと言います。

防空壕暮らしも増えました。六月末で七万一千世帯二十三万五千人という記録が残っています。私も落ち着き先が決まるまで、何日か壕で寝泊りしましたが、狭くて窮屈なうえ、何よりこたえたのが湿気でした。健康面への影響が心配されるようになり、警視庁は「壕舎生活指針」なるものを発表しています。水、便所の設備など伝染病予防のほかは、湿気対策重点。乾燥した土地を選べとか、床はなるべく高く、少なくとも一尺以上にするとか、食事も壕の外でとるように勧められています。

そしてこの頃にはもう、もう日本中が地下に潜るようになっていたのです。その一つが、信州松代への大本営移転計画です。松代盆地には、しっかりとした岩盤を持ち、空からの攻撃にも耐えられる象山、皆神山などがあり、神の国「神州」に通ずる意味もありました。昭和十九年十一月から約七千人を動員して突貫工事が始まり、敗戦までに総延長十三キロ、床面積二万六千平方メートル、人員にして一万人を収容できる地下大本営の八割ほどが完成していました。天皇の御座所になる部屋は格子が檜、天井板には秋田杉が使われましたが、結局使われることはなく、戦後は一時戦災孤児の収容施設になり、現在は東大地震研究所の観測や、しいたけ栽培などに利用されているようです。

それに、天皇ご自身には、東京を離れる意志はありませんでした。内大臣の木戸幸一も「松代へ行けばもうおしまいだ。結局、洞窟の中で自殺する以外になくなってしまふ。そこまで行けば国が減んでしまふ」。こういう考えでしたから、昭和二十年四月十三日に皇居が初めて空襲被害を受けると、近衛第一師団に吹上防空室の工事を命じたのです。防諜上「一号演習」と呼んでいましたが、十二回の爆弾の直撃にも耐えられるよう、鉄筋コンクリート、土砂などで九層にし、一番上には草木を植えてカムフラージュ。高さ十四メートルの小山が出現したようだったと、言われます。

この間、陸海軍は何とか戦勢を挽回しようと、特殊兵器の開発をあれこれ試みています。昭和十九年十一月三日、千葉県の一宮など太平洋岸からアメリカ西海岸に向けて放たれた風船爆弾もその一つです。戦争中の秘密兵器は、頭文字を丸で囲んで秘匿名としていましたが、風船爆弾の場合は「マルフ」、「フ号作戦」

です。和紙を貼り合わせて直径十呎の巨大な風船を作り、中に水素を詰め込んで焼夷弾や爆弾を吊し、冬の偏西風に乗せてアメリカ本土を攻撃しようというのです。勤労動員の女学生や女子挺身隊を動員して作られました。所詮は風任せ。行き先は風に聞いてくれ、というようなものですから、軍需工場などを狙えないことは最初からわかっていました。まあ、山火事でも起こして騒ぎになればいいと、心理的な効果を狙ったものです。四月になると風速が落ち、風の方向も一定しなくなるので、二月末で生産は打ち切られました。三月までに九千個ほど飛ばし、外電は「モンタナ州で山火事が起きた」と伝えていきます。

陸軍が開発に最も力を入れたのは、「決戦兵器」の頭文字からとった「マルケ」という特殊爆弾です。爆撃機が一万呎の高空から、空母、戦艦におおよその照準でこの爆弾を投下します。高度二千呎になるとタイマーにより照準装置が作動し、目標の発する熱線を捕捉して突進、百発百中を狙った誘導弾でした。昭和十九年五月下旬、陸軍兵器行政本部に大学や東芝、住友通信工業などのメーカーを集めてプロジェクトチームを作り、開発を急ぎましたが、結局戦争には間に合いませんでした。私が勤労動員で行っていた工場でも、この「マルケ」の部品開発に当たっていて、設計課長が夜遅くまで図面とニラメっこしていたのを覚えています。何か大変な兵器だということは知っていましたが、設計課といっても東大出の課長のほかは、工場へ出てくれば療養所通いが日課の中年の課員が一人、あとは私たち中学生です。私たちの仕事はトレースだけの単純作業でしたが、大久保の兵器行政本部に図面を届けるたびに、「私たちのやっていることで大丈夫なのかなあ」と、ぼんやりした不安を感じたものでした。

海軍の方は、木製の体当り飛行機「桜花」に大きな期待をかけました。発案者は、昭和三年に呉海兵団に入った水兵上がりの大田正一特務少尉。厚木基地輸送機の偵察員をしていて、「人間爆弾」ともいうべき特攻兵器のプランを上司に提案したのです。それは大量の爆薬を詰めた一人乗り小型機で、一式陸上攻撃機の胴体に吊り下げて目的地まで運ぶと、あとは自力で空母を攻撃できるように、速度を増すためのロケットもつけていて、体当りさせようというのです。この提案に飛び付いたのが、「海軍航空の神様」といわれた源田実大佐、戦後航空自衛隊幕僚長や参議院議員をした源田です。東大航空研究所教授の木村秀政に依頼して、この人は戦後初の国産旅客機YS-11の設計に携わった人ですが、大田のプランを設計図に纏めたのです。大田の名前をとって「マル大兵器」と呼ばれましたが、強化木材で翼を作った全長六呎の試作一号機が完成したのが昭和十九年の九月十二日でした。

制式名称は「桜花」。海軍が期待したのは、何よりも木の翼で増産が望めることです。一式陸攻が航空魚雷を発射するには、敵艦に八百呎から一千呎近付かなければなりません。これが「桜花」なら、陸攻は二十キから二十五キ離れた所で

切り離せばいいのです。また航空魚雷は時速七十五キ。敵艦が発見すれば退避行動をとることができませんが、「桜花」は四百キ。から四百五十キ。、ロケットを噴射すれば六百五十キ。も出て、退避の余裕がありません。しかも、人が乗って体当たりさせるのですから、命中率はぐんと高くなります。

十月一日、鹿島灘沿いの神之池基地に桜花特攻部隊の第七百二十一航空隊が編成され、「神雷部隊」と命名されました。飛行隊長は歴戦のパイロット、野中五郎少佐。二・二六事件で自決した麻生歩兵第三連隊の中隊長・野中四郎大尉の弟で、父親も日露戦争に従軍した退役陸軍少将でした。九州鹿屋基地に進出していた「神雷部隊」に出撃命令が出たのは、アメリカ機動部隊が沖縄に迫った昭和二十年三月二十一日でした。「桜花」十五機を搭載した野中少佐指揮の一式陸攻十八機、掩護戦闘機十機が発進しましたが、現実には計算通りにはいかなかったのです。米軍はリーダーで百キ。先で日本機を捉え、戦闘機隊が待ち伏せ態勢をとっていました。もともと一式陸攻は、米軍が「ワンショット・ライター」と呼んでいたほど、一撃されれば簡単に燃え上がる、防御には極めて弱い攻撃機です。しかも陸攻が抱えている「桜花」は重量二千四百キ。、航空魚雷の倍以上の重さがあり、「桜花」を高い高度で放すため燃料も余計に積まなければなりません。その分スピードが落ちて、敵戦闘機の絶好の餌食となり、「神雷部隊」は目標到達前に全機撃墜されてしまったのです。

鹿屋基地で指揮をとっていた第五航空艦隊長官宇垣纏中将は、日記「戦藻録」にこう書いています。「壕内作戦室に於いて、敵発見、桜花発進の電波に耳をそばだてつつ待つこと久しきも、杳として声なし。今や燃料の心配をなし『敵を見ざれば南大東島へ行け』と令したるも之亦何等応答するなし。其内掩護戦闘機隊の一部帰着し、悲痛なる報告を致せり。即、一四二〇頃艦隊との推定距離五、六〇浬に於いて、敵グラマン約五〇機の邀撃を受け空戦、撃墜数機なりしも我も亦離散し、特攻は桜花を捨て僅々十数分にして全滅の悲運に会せりと。嗚呼」

こうして本土決戦を前にして、海軍の「桜花」は根本的な見直しを迫られ、陸軍期待の「マルケ」も完成の見込みが立っていません。しかも、本土防空に当たっている陸軍の第十飛行師団は、二月十六、十七日の関東地区に対する十一波、延べ千六百機の艦載機来襲で、自爆、未帰還五十一機を出し、多くの熟練パイロットを失っていました。そこで大本営は、航空兵力を本土決戦に集中させ、敵上陸船団に対する「全機特攻」に当てることにして、残存航空戦力を温存するために防空戦闘を制限する方針を打ち出したのです。しかし、本土空襲は激化の一途を辿っていました。お手元の資料でもお分かりのように、B29は四月から毎月万遍なく二千機から三千機やって来ていましたし、硫黄島が落ちると長距離戦闘機P51が関東、東海地区に、沖縄戦のメドがついた六月以降は、沖縄から中、小型機が戦爆連合して九州地区に來襲するようになりました。これに機動部隊の艦載機と、

言ってみれば日本中の空を敵機が飛び回っていると云うのに、これを迎撃する日本機の姿がほとんど見えなくなったのです。

「防空戦闘制限」の方針は、航空隊の士気を低下させましたが、それ以上に国民に軍に対する不信感を生むことになりました。それまで、サイパン、硫黄島、沖縄など外地の戦いは、国民は適当にごまかされた大本営発表によつて知らされるだけでした。ところが本土防空では、敵機が跳梁し、傍若無人の攻撃をしているというのに、反撃する力もないことを、国民が自分の目で見ることになったのです。これが「もうダメなのではないか」と、敗戦に対する予感、そして厭戦気分を抱かせることになりました。戦後、アメリカの戦略爆撃調査団の調査によると、昭和十九年二月に敗戦を考えた日本国民はわずか二%です。それがサイパン陥落とB29の本土空襲から増え始め、十九年十二月一〇%、二十年三月一九%、沖縄戦が絶望的になった六月には四六%にも達していたのです。

「どこに行つても戦争は、いつ終るだろうかという点に話題が向けられて行っている。誰も戦争に飽いたことが推知される」。四月十二日の日記に、こう書いている。外交評論家の清沢冽は、このあと五月二十一日に終戦を見ることなく、肺炎で急死します。フランス文学者の渡辺一夫は、六月十二日の日記に「日本は米軍に包囲され、まさに自殺しようとしている。何千万という民家が、そして男も女も子供も一緒に、焼かれ破壊された。夜、空は赤々と照り、昼、空は暗黒となった。東京攻囲戦はすでに始まっている。戦争とは何か、軍国主義とは何か、狂信の徒に牛耳られた政治とは何か、今こそすべての日本人はそれを悟らなければならぬ」と書いています。

五月八日の「高松宮日記」には、「麦ガ穂ヲ出シタ。一昨年モ麦ヲ蒔イテコレガ穫レルマデ無事カト思ツタ。昨年モ畑ヲ見テイツマデ続ケラレルカト考ヘタ。今モ庭ノ美シサ、草、木ノ育ツノヲ見テ愈々来年ト云ハズ秋ハドウナルカト、ヤハリ淋シサニ堪ヘヌ。道真ノ『東風吹かば』ノ歌ガシミジミト想ハレル」とあります。また参謀本部作戦部長の宮崎中将も、五月二日の日記に「予曰ク 一体此戦争ノ終末ヲ何レニ帰着セントスルヤ 大東亜戦争前力、日支事変前力、満州事変前力、日露戦争後力前力、日清戦争前力後力、更ニ遡テ御維新ナルベキヤ」と書いているのです。

日本の国力、戦力はもう限界にきていて、一刻も早く終戦しなければならぬ時期になっていました。そしてそれは、鈴木貫太郎が四月七日に組閣をした時からの決意でもあったのです。鈴木は組閣直後、各閣僚に命じて所管事項の現状と見通しを調査させています。内閣書記官長の迫水と総合計画局長官の秋永月三陸軍中将が幹事役となり、陸海軍の軍務局などを総動員して一か月近くかかって調べ上げたのですが、迫水は「ちようど陸海軍も、振り絞り得る最後の力を知りたがっていたので、その話に乗ってきたのだ。皮肉な言い方をすれば、現状と見通

しを知られば、バカでない限りいやになる。この戦争が到底継続できるものでないことがわかる。すると閣内から終戦和平の声が起こってくるだろう。これが鈴木 の狙いではなかったと思う」。こう話していますが、陸軍の主張している本土決 戦論など、実際には不可能であることを数字の上から確かめようとしたのです。

迫水は五月上旬、「調べてみますと、驚くべき結果が出ました」と、鈴木に報 告しました。鉄鋼の生産は、計画では昭和二十年は三百万トほどになっていま す が、一月以降の実績は月平均十万ト足らず、計画の三分の一です。飛行機も月産 一千機と予定されていたのが、半分も出来ず、しかも原料のアルミニウムがなく なって、九月以降は計画的生産の見込みが立ちません。石油は全く底をついてお り、海軍の艦隊は重油に大豆油を混ぜて使っている有様です。空襲被害も予想以 上に大きく、B29一機当たりの焼失戸数は二百七十戸余り。この状況で行くと、 九月までに全国の人口三万以上の都市はなくなってしまう計算で、船舶も年内に は一隻もなくなりません。迫水が「要するに、日本の生産は九月まではどうにか組 織的に運営されるだろうが、それから先は全く見当がつかない。その上ソ連も兵 力をソ満国境にどんどん集めており、この状況では九月までに何とか戦争の終末 をつけなければならぬということでありませう」。こう報告すると、鈴木首相も 「七、八月頃には重大な危機に直面する」ことを痛感したのです。

私が資料を調べていて興味深かったのは、大平内閣の民間人外相として話題に なった大来三郎が当時大東亜省に勤務していた、この調査に加わったのですが、 東大工学部教授の富塚清を訪ねてこんな話をしてのことです。富塚の「ある科 学者の戦中日記」によると、「今後できることは竹槍戦争しかないという結論に達 した由である」。そして「敗戦後日本は徹底的に軍備の制限を受けると思うが、そ れがかえって日本の幸いになるかも知れない。日本は一等国の資質は持つていな いが、二等国としての資質は立派に持つているのである、云々」と。富塚も共鳴 して「軍備の全面撤廃がきたって、喜びこそすれ、めそめそはしない。軍備とい うものだって、カーキ色の服の下の軍備だけが軍備ではない。セピロ服の下の、 科学技術力や敢闘精神は、いずれも潜在的軍備である。今度の日米戦もカーキ色 がセピロに負けたのだともとれる」

富塚は「日頃の持論を、よい聞き手にぶちまけ、近ごろになく、意気上る」と 書いていますが、日本の戦後は大来の言う通りになりました。富塚は前にお話し しましたが、七年前に百歳の高齢で亡くなった外相秘書官加瀬俊一さんの呼び掛け で、「三年会」という「日本の将来を考える会」に参加した一人です。私は戦後の 日本が、廃墟から素早く立ち上がることができたのは、やはり、こうした日本の 将来をしっかりと見据えた人たちのいたことが大きかった、と思うのです。

それはともかくとして、鈴木内閣の終戦工作の難しさは、国内最大の勢力であ る陸軍の認めない終戦は、終戦にはならないことでした。陸軍は阿南惟幾を陸相

として入閣させる条件として、「飽く迄大東亜戦争を完遂すること」。これを第一の条件に挙げているように、戦争継続一本槍です。終戦を決意している鈴木首相も、「この内なる確信は、当時としては深く内に秘め、だれにも語り得べくもなく、余の最も苦悩せるところであった」と話していますが、終戦の本心は一切見せずに聖戦完遂を説き、「わが屍を越えて行け」と檄を飛ばしていました。迫水は回想録に、「もし最初から鈴木総理が、終戦への兆候を見せられられたら、陸軍はいち早く内閣をつぶしていたであろうから、日本が果してあの最終の時期に終戦しえたかどうか、したがって戦後の復興が今日の如くすみやかに行われえたかどうか判らない。まことに鈴木総理の深い思慮であったと思う」と書いています。

この間、「日ソ中立条約を延長しない」と通告してきたソ連の参戦は何としても防ぎたいと、陸軍の希望もあつて、五月十一日に最高戦争指導会議の六人の首脳だけで開かれました。十四日には、首相、外相、陸海軍大臣に参謀総長、軍令部総長の間で「ソ連に和平の仲介を依頼すること」で合意が出来ていましたが、問題は、もう国力の限界にきていることが分かっているにもかかわらず、陸軍に納得させるかです。そこへ陸軍が、今後の戦争指導方針を「一億国民玉砕を賭して本土決戦を断行する」。この趣旨に確立しておく必要があるとして、内閣に御前会議の開催を申し入れてきたのです。

迫水は「この機会に、終戦への努力の緒を啓いておくのも一方法である」。そう考えて、御前会議に提出する書類の作成にかかりましたが、五月二十三日の深夜、大本営参謀で戦後伊藤忠の会長をされた瀬島龍三中佐が訪ねて来たのです。迫水は、二・二六事件の時の首相で、終戦工作に奔走している岡田啓介の娘婿。瀬島さんも、このとき岡田と誤認されて射殺された、岡田の義弟で首相秘書官の松尾伝蔵陸軍大佐の娘婿でしたから、姻戚関係にあり親しい間柄でした。瀬島さんの回想録「幾山河」には「四月半ば」とありますが、これは迫水が参議院議員時代の昭和五十一年に講演した際、「四月中頃」と話しているもので、どうもそれに合わせたようです。迫水は瀬島さんと話していて、眠れないままに長男久正に手紙を書いていきます。「この戦争がどうなっていくかによって、若しお父さんが御国に殉じたというようなことを聞く場合があったら、決して悲しんだりあわてたりしてはいけません。お前の雄々しい心の中にこそ、お父さんは生きていますのだ」。その手紙の日付は五月二十四日付でした。

迫水は「龍三さん、内外の戦局は我が国にとって極めて悪い。鈴木内閣としてはまさに正念場だ」と前置きして、「陸海軍は本土決戦を強く主張しているが、本土決戦で本当に勝ち目はあるのだろうか」と切り出しました。瀬島さんは現役の軍人でしたから、一瞬返答に困ったと言います。しかし、国家、民族にとって重大事であると思い、「現在の私の立場を離れて、個人として本心を申し上げる」

と、こう話したのです。「今、考えなければならぬことは二つある。一つはソ連の対日参戦、もう一つは本土決戦の問題である。私の判断するところ、特に伝書使旅行のときのソ連軍の東送状況、東に軍隊を送っている状況、ソ連の中立条約不延長通告などよりして、必ずや北滿が嚴冬期を迎える九月以前に、対日参戦するであろうと考えられる。これは我が国の戦争遂行に、決定的な影響を与えると思う。また、本土決戦については、従来の太平洋における離島作戦と異なり、陸軍の大兵力をある程度集中使用し得るので、その点は有利であるが、その成否の見通しは四分六分と言わざるを得ない。それは陸海軍の航空戦力が、ほとんど皆無に近いからである。ことに本土決戦の場合は、婦女子を巻き込み、全国土は完全に焦土と化し、その結果は戦後日本の復興も国体の護持も、共に不可能となるであろう。要は、ソ連参戦前に戦争終結を策すべきである」

瀬島さんは「伝書使としてモスクワの日本大使館に旅行した際、また沖縄作戦の間、絶えず考え悩んでいたことを率直に披瀝した」と回想録に書いています。二月のヤルタ会談で対日参戦を約束していたソ連は、四月に入ると続々と軍隊を極東に送り始め、総兵力は推定百五十万、飛行機四千九百機、戦車三千七百台です。しかも大本営には「越冬準備をしていない部隊」、つまり夏に行動開始が予想されるとの報告が来ていたのです。

天井の一角を見つめながら、黙々と聞いていた迫水は、「龍三さん、ありがとうございます。本当のところ、よくわかったような気がする。鈴木総理にも報告し、一身を顧みずに戦争終結に全力を尽くしたいと思う。いつ会えるかも知れないが、お互いに国のために頑張ろう」。こう言って別れたのですが、迫水四十二歳、瀬島さん三十三歳でした。そして瀬島さんは、七月一日付で関東軍参謀として満州に赴任し、シベリア抑留を経て二人が再会したのは十一年後の昭和三十一年八月、品川駅のホームだったそうです。

今後の戦争指導方針を決定するため、御前会議が開かれたのは、沖縄戦が絶望的になってきた昭和二十年六月八日でした。ところが、ここで決まった「今後採ルベキ戦争指導ノ基本大綱」は、「七生報国ノ信念ヲ源力トシ」、つまり楠正成が唱えていた「七たび生まれ変わって国に報いる」。この信念に基づき、「地ノ利人ノ和ヲ以テ飽ク迄戦争ヲ完遂シ以テ国体ヲ護持シ皇土ヲ保衛シ征戦目的ノ達成ヲ期ス」。要するに、強気一点張りの精神主義的な戦争継続論なのです。海軍大臣米内光政の特命で密かに終戦工作に当たっていた高木惣吉少将が、「八千万の運命を定むる最後の土壇場に、この人達は空疎な形容詞の陳列を以て、自らの良心を寝かしつけたとしか思えない」。こう嘆くようなものでした。

それでいて、何とも奇妙なのは、基礎資料としてこの会議に提出された「国力ノ現状」では、「戦局ノ危急ニ伴イ陸海交通並ニ重要生産ハ益々深刻ヲ加工近代

物的戦力ノ綜合發揮ハ極メテ至難トナルベク民心ノ動向亦深く注意ヲ要スルモノアリ」。こんな悲観的な国内状況を、率直に認めているのです。表向きは「あくまで戦争継続」を謳いながら、その一方で「現在の国力では、もうとても戦えない」と言っているようなものです。そこには、「本土決戦」を主張する陸軍を宥めずかしながら、何とか終戦に持つて行こうとする、鈴木首相や迫水書記官長の苦心のほどがうかがえます。

迫水は、御前會議に提出する「国力ノ現状」を纏めるに当たって、まず綜合計画局長官の秋永に協力を求めました。六月に綜合計画局に新設される戦災復興部長に就任予定の毛里英於兔、第一部長になる美濃部洋次と、三人で報告書を作成することにしました。秋永は、昭和二年に陸軍派遣学生として東大経済学部で三年間学び、以来商工省の物資調整官、企画院第一部長として、言わば軍人工コノミストの道を歩んだ人です。そして迫水が企画院の課長をしていた昭和十五年から十六年にかけて、四人は一緒に仕事をして「企画院の四天王」といわれた仲でした。

五月三十日、どうやって報告書を作成するか話し合いましたが、実は三人には日米開戦前、企画院で「物的国力の見通し」を纏めた際に、苦い思いがあったのです。それは「臥薪嘗胆策は物的国力の点から成立しがたい。戦争に踏み切った場合、次の年には物的には心配はなく、三年目には物的国力は戦争をした方がよくなる」。こういう結論で、アメリカの国力を軽く見てしまったのです。開戦前、アメリカの生産力は少なくとも日本の十倍はあったでしょう。国家総力戦の時代に、日本がアメリカを相手にして長期間戦うには、最初から無理がありました。それを、開戦早々に南方の資源さえ押さえてしまえば、後はそれを国内に輸送して軍需生産を拡大すればよい。そう考えたのが、いかに甘かったか。空襲や潜水艦攻撃で資源を運ぶ船がやられてしまえば、軍需生産が落ち込むのも当然なのです。判断の誤りを繰り返さないためには、事実だけを語ることにし、せいぜい一か月か二か月先、七、八月までの予測に止めようということ、迫水たち三人の意見は一致しました。また、国民が現在何を考えているのか、何を望んでいるのか、特に「民心ノ動向」を載せて、宮中や陸海軍首脳に読んでもらうことにしたのです。

国力の現状は、石炭から見ようということになり、翌日の三十一日、東京瓦斯の石炭課長を首相官邸に呼びました。満州、樺太の石炭はもうとつくに本土に来なくなっていて、北海道と九州の石炭が命綱です。ところが青函連絡船は、十九年夏までは一日二十一往復していたのが、もう十三運航が精一杯でした。一日一万トンの石炭を運ぶには、十七本から二十本の石炭列車が必要ですが、空襲でとても望めません。中枢地帯の工業は中期以降、石炭供給の途絶で相当部分の運転休止が予想されました。航空機も軍需省航空兵器総局の数字では、四月千五百六十

七機、五月千五百九十二機生産見込みとなっていました。水増し数字でした。三菱や中島飛行機では、空襲でもうエンジンの生産が出来なくなっていて、首なし飛行機、つまり発動機、プロペラのない、飛べない飛行機の数字まで足したもので、実際の完成機数は、四月が四百一十一機、五月も五百機あるかどうかだったのです。

特に付け加えることにした「民心ノ動向」では、はつきり国民の士気低下を指摘しました。「敵の侵寇に対しては抵抗する気構えを持つているが、他面局面の転回を求める気分がある。軍部及び政府に対する批判は逐次盛んとなり、ややもすれば指導層に対する信頼感に動揺を来しつつある傾向がある。その上、国民道義は頹廢の兆しがある。また自己防衛の觀念が強く、敢闘奉公精神の昂揚も充分でない。庶民層には農家でも諦観、自棄的風潮がある。指導的知識層には焦りと和平を求める気分が底流となりつつあるのが見て取れる。こうした情勢に乗じて、一部野心分子は変革的な狙いを持って蠢動している形跡がある」。そして沖繩戦が最悪になった場合、「民心ノ動向ニ対シテハ特ニ深甚ノ注意ト適切ナル指導トヲ必要トス」と結んだのです。

六月八日の御前会議に先立って、六日の最高戦争指導会議で議案を審議することになり、迫水たち内閣側と陸海軍の幹事、幹事補佐の間で「戦争指導大綱」の起草にかかりました。まずもめたのが、「一億玉砕」の言葉を入れるかどうかです。陸軍側は「根本方針を明確にするためにも必要だ」と、強硬に主張しましたが、内閣側が反対して削除させました。吉積正雄陸軍軍務局長の話では、参謀本部の幹事補佐が納まらず、阿南陸相の所に持ち込んで「勝利か然らずんば死か」。この言葉を復活挿入させようとしたが、阿南は「死などという言葉は国民に衝撃を与える」と言って、許さなかったと言います。

逆に内閣側は、「終戦を考慮する」意味の言葉を、何とか入れておこうとしましたが、迫水は「思うように出来なかった」と話しています。代わりに、「飽く迄戦争完遂」の言葉を削除させようとしたのですが、陸軍はこれにも反対します。そこで迫水は、陸軍の原案に「国体ヲ護持シ皇土ヲ保衛シ」とあるのに目をつけ、「国体護持と皇土保衛を戦争目的とし、この目的が達せられることであれば終戦すべきである」。こう解釈することを提議し、一部異論は出たものの承知させたんだそうです。また、陸軍側が「国力ノ現状」が悲観的過ぎるとして、「戦争指導大綱」の線に合致するよう修正すべきだと主張しましたが、秋永綜合計画局長官は「報告には、そのまま本当のことを記すべきだ」とはねつけました。

こうして六月四日に草案が出来ましたが、迫水が鈴木首相に見せると、明らかに不満そうです。迫水は「どうせ総理の進むべき道を変更しないという決心さえあれば、今のところは、陸軍を怒らせないように、うまく事を運ぶのが適当かと思えます」。こう進言しましたが、「こうした文書は、ある範圍の官庁に配布し

なければならぬ。自然、戦争継続論者の目に触れることを覚悟しなければならぬ。その場合の結果を恐れて、文面はあのように強気のものにしておくことにしたのだ」と話しています。

海軍軍務局長の保科善四郎中将も、戦争一本槍の草案を読んで当惑したといいます。六人の首脳が、自分たちには内緒で終戦に関して話し合っていることを知っていましたから、「これでは戦局の実情に合わないが、時間的に根本的修正は間に合わない」。そう思って米内海相に伺いを立てると、米内は笑いながら「これはこれでいい」と言います。保科には、すぐ米内の意図が推察できたそうです。つまり「終戦は早くやらなければならないが、それは六巨頭以上で考える。その他軍官民全ての者はかえって一致結束、戦う姿勢を示して置くことが、終戦をうまくやるには大切なことだ。これは表向きのものであるから、戦争一本のことを高く唱えておくだけでよろしい」というわけです。

六日の最高戦争指導会議は、午前八時半から十時間の長時間に及びました。迫水が「アメリカを破ることは、もはや望みがない。それで皇土を保衛し、国体を護持し得れば、この戦争は完遂されたことになるというのが、冒頭の方針に謳われた趣旨です」。こう提案理由を説明すると、東郷茂徳外相がすかさず「なぜ、その意味をはつきりするように書かないのか」と、鋭く迫ります。迫水は「そのようにはつきり書くことには、寧ろ弊害があるんです」と答えましたが、まだまだ「和平のことはうっかり口に出せない」。みんな、こんな気持ちでいる時でしたから、それ以上の追及は出ず、迫水の狙い通り、「国体護持と皇土保衛」が「終戦の条件」として、最高会議に認知されることになったのです。

御前会議が開かれたのは六月八日でした。御前会議というのは、決議内容は予め最高会議で決めてあって、それを天皇の権威で承認するといった形式的なものです。統帥部が「本土決戦」の決意を披瀝し、最後に鈴木首相が「日本の情勢は真に危急にある」ことを認めた上で、「もはや知恵とか才覚ではなく、まっしぐらに所信に向かって邁進するほかはない」。これまた強気の挨拶をして、閉会になりました。天皇が発言されないのはいつものしきたりでしたが、さすがにこの時ばかりは驚き、嘆かれたようです。「国力ノ現状」が、「どの点からも戦争は不可能」の結論を出しているのに、軍部はなお「本土決戦をする」と言うのです。しかも天皇は、六巨頭の「ソ連に和平仲介依頼」の合意をご存じありません。「他言無用、絶対秘密」を申し合わせていたからですが、この合意は内大臣の木戸も知らなかったのです。列席者の手記には、「陛下憂色に包まる」とあります。

天皇は、すぐ木戸を呼ばれました。「木戸日記」には簡潔に「一時五十分より二時二十五分まで、ご文庫にて拝謁」とあるだけです。天皇は「こういうことが決まったよ」。ただそれだけ言って、会議内容の書類を渡されます。御前会議の内容を内大臣に見せるなんてことは、かつてなかったことでしたし、また「みな

誰か言い出すのを待っているようだ」とも洩らされます。こんな状況で本土決戦を迎える無理は誰もが気付いているのに、問題は誰がそれを言い出すのか。それは、木戸に「やれ」と暗示されているようでもありました。木戸が御前を下がってくる、高知県知事の高橋三郎が待つていました。「木の太砲で演習をしているんですよ。ああいうものを国民に見せたら、とても士気は持ちません」と言います。木戸は、政治を軍の手から取り戻さなくてはならない。舵を百八十度転換させるために、「猫の首に鈴をつける役割」を自分がしなければならぬ。心中深く、そう決意したのです。

木戸はその夜、「時局收拾につき、この際果断なる手を打つことは今日の我国に於ける至上の要請なり」として、時局收拾案を起草しました。「極めて異例にしかつ誠に畏れ多きことにて恐懼の至りなれども、下万民のため、天皇陛下の御勇断をお願い申し上げ、左の方針の戦局の收拾に邁進するの外なしと信ず」。具体的には、天皇の親書携行の使節をソ連に送り、和平仲介を依頼するというものです。翌日、木戸が試案を天皇にお見せすると、満足のご様子で「速やかに着手するよう」言われます。しかし、御前会議で「徹底抗戦」を決定した直後ですから、それを表に出すわけにはいきません。木戸もまた、六巨頭がすでに「ソ連に仲介依頼」で合意していることを知りませんから、鈴木首相をはじめ六巨頭を各個撃破していこうと、行動を起こすことになりません。

日本の終戦工作は、木戸と六巨頭の意向がソ連に一致したことで、結果的にソ連一本槍になっていくのですが、それにしても、なぜソ連だったのでしょうか。六月一日には、木戸と学習院同窓の東大法学部教授高木八尺が法学部長の南原繁と訪ねて来て、グルー元駐日大使が國務次官になり、アメリカ國務省に日本派が進出している機会をとらえて、「アメリカと直接交渉すべきだ」と、説いたばかりでした。八月九日にソ連が中立条約を破って、満州から一斉に攻め込んできたことを知っている私たちからすれば、愚策以外の何ものでもなかったのですが、木戸はこう言っています。「ソ連を選んだのは、仲介が小国では困るし、陸軍もソ連に顔が向いているんだから入りやすいと思ったんだ」。そしてそれはまた、東郷外相の考えでもあったのです。「軍を終戦に引つ張って行くためには、ソ連の参戦を防ぎたいという軍側の気持ちに一応乗って、ソ連に話を持ちかけ、いよいよ最後の頼みの綱もダメだということをお納得させる必要があった」と言うのです。

東郷は、ソ連との交渉をソ連大使をしたことのある広田弘毅元首相に依頼しました。広田が箱根の強羅ホテルに疎開していたソ連のマリク大使を、散歩のついでにちよつと寄ったという形で訪ねたのが六月三日です。そして翌日の夕食招待に漕ぎ着けたのですが、マリクは表面はにこやかに応対していても、腹の中ではせせら笑っていたことでしょう。のらりくらり、回答の引き延ばすために、本国

政府への報告も電報ではなく伝書使を使う有様です。しかも、それは十分予想されたことだったのです。佐藤尚武ソ連大使からは、八日付の至急電報が来ていました。「ドイツ壊滅の今日、ソ連として何を苦しんで、ソ米関係を犠牲にしています、日ソ関係の増進を考えるであろうか。今日において中立態度の維持が関の山であつて、戦局の発展如何によつては、それさえ困難になるであろうと覚悟しておかねばならぬどころか、ソ連がわが弱みにつけこみ、豹変して、われに武力干渉さえ辞さぬ決意を示したとしても、わが方としては如何ともなし難いことである」

極めて的確な意見具申でしたし、瀬島龍三中佐も迫水に「ソ連は九月までに必ず参戦する」と警告していたのです。それに連合国側が表面は「無条件降伏」を唱えていても、話し合いの余地が全然ないわけのものでないことは、外交のベテランである東郷なら百も承知のはずでした。しかもこの時期は、スイス駐在の海軍武官藤村義朗中佐がダレス機関との接触に成功し、アメリカとの直接交渉の糸口が掴めた時だったのです。どうして、こうした情報が最高会議に上げられなかつたのか。情報がどこかで止まつてしまつて、全員の共通認識にならない。戦争中の日本に常につきまかつた組織的欠陥でしたが、もし最高会議の全員が情報を共有していたら、もつと適切な判断、そして処置がとれたのではないでしょうか。

この間、第八十七臨時議会が御前会議の開かれた六月八日に召集され、鈴木の施政方針演説をめぐつて、「天祐天罰事件」という倒閣運動に発展するほどの騒ぎになるのです。発端は、議会側が「沖繩の戦局悪化に鑑み、政府の今後に対する態度を明らかにして国民の覚悟を促し、国内結束を固めるため、議会を開いてほしい」。こう要請してきたことに始まりますが、海軍大臣の米内は反対でした。「いま議会を開けば、主戦論のみが強調され、勢いの赴くところ、取り返しのつかない約束をさせられる羽目になる。また、政府が少しでも和平の意図を悟られるようなことでもあれば、議会は紛糾し收拾がつかなくなる」と言うのです。

しかし、反対理由となると「空襲で議員の身辺が危険だから」ぐらいしかありません。ところが衆議院副議長の内ヶ崎作三郎が、鈴木に膝詰め談判で「そんなことならご心配に及びません。我々は国のためには、兵士と同様身命など投げてかかっています。議会を尊重して下さい。戦時緊急措置法の如き重大問題を、緊急勅令などで片付けるのは憲政の常道に反します」と、詰め寄つたのです。政府は、国家総動員法よりもつと強力な権限を政府に与える戦時緊急措置法案を、勅令で決めることにしていたのですが、結局鈴木が議会召集に同意したのは、私内ヶ崎の「議会を尊重して下さい」。この一言が鈴木を動かし、また鈴木の説のヒントにもなつたように思います。

鈴木は九日の施政方針演説で、こんな演説をしたのです。翌日の新聞が「本土決戦 我に有利 断じて戦ひ抜け いま一段の努力要請」。こういう見出しで伝えて

いるように、まず型通りの叱咤激励をした後、「日本の天皇陛下ほど世界の平和と人類の福祉とを願っていらつしやる方はない」と述べ、こう続けました。「私は嘗て大正七年練習艦隊司令官として、米国西海岸に航海した折、桑港における歓迎会の席上、日米戦争観につき一場の演説を致したことがあります。その要旨は、日本人は決して好戦国民にあらず、世界中最も平和を愛する国民であることを、歴史の事実を挙げて説明し、日米戦争の理由なきこと、若し戦へば必ず終局なき長期戦に陥り、殉に愚なる結果を招来すべきことを説き、太平洋は名の如く平和の海にして、日米交易の為に天の与へたる恩恵なり。若し之を軍隊輸送の為に用ふるが如きことあらば、必ずや両国共に天罰を受くべしと警告したのであります」。そして「その後二十余年にして相戦わざるを得なくなつたことを遺憾」とし、「今日、我に対して無条件降伏を揚言して居るように聞いて居りますが、かくの如きは正に我國体を破壊し、我民族を滅亡に導かんとするもので、これに対して我々の執るべき途は唯一つ、あくまで戦ひ抜くことであります」と結んでいます。

情報局は「両国共に天罰」の箇所、つまり日本も天罰を受けるということが穩当ではないと思つたのでしょう。翌日の新聞発表では、お手元の資料でゴシツクの箇所が削除されていますが、鈴木はいつたい何を考えたのでしょうか。首相秘書官をしていた長男の一は、「父は実は、この議會を通じて、アメリカに呼びかけるチャンスを描もうと、外交秘策を秘めていたのだ」と話しています。一つは、議會を重んずるアメリカに対して、日本の國政はこんな急場になつても議會尊重の平常心を失つてはいないぞ、という國際的パフォーマンス。もう一つは、平和を願う天皇であり、平和を愛する日本国民なのだ。それなのに連合国は無条件降伏を要求し、日本に最後の一人まで戦争を続けさせようというのか。「無条件降伏要求」の翻意を促し、「國体の保存を含めた降伏条件を提示するなら、それに応ずるぞ」。こういった鈴木内閣の姿勢を、暗黙のうちに表明するサインだったと言ふのです。

各省から出てきた資料を元に、演説原稿を書いたのは迫水です。鈴木に「何か特別におつしやりたいことがあつたら、おつしやつて下さい」と言うと、鈴木は「別に何も無いよ、普通でいいよ」といいながら、まるで取つてつけたように練習艦隊航海の話を書きます。迫水もピンときて「ああ、これを書けということなんだな」と、前後の配列なんかを考えてこの話を入れたんだそうです。余談になりますが、このテーブル・スピーチを通訳したのは艦隊参謀の佐藤市郎大尉、岸信介、佐藤栄作元首相の一番上の兄さんです。鈴木も自伝の中で「非常に英語の達人な人であつた。司令官の日本語演説よりは、佐藤君の英語演説の方がよほど能弁だつたと大笑ひになつた」と書いていますが、中将で病没しました。

七日の閣議の後、迫水が閣僚たちに演説原稿を見せると、みんな「これは問題

になりそうだ」と首を横に振ります。「天罰」の箇所です。「総理のこの話を全部削ってしまおうわけにはいかないのか」といった声まで出ましたが、迫水は「総理の是非とも入れてくれとの希望です」と話し、国務相の情報局総裁下村宏らが残って原稿に手を入れることになりました。下村は台湾総督府の役人から朝日新聞副社長、日本放送協会会長になり、「海南」のペンネームで数多くの論文、随筆を書いている文章家です。問題の「両国共に天罰」を「天譴必ずや至るべし」、つまりアメリカだけが天のお叱りを受けるだろうと、こう聞こえるように直したのです。

ところが翌朝、迫水が鈴木に修正箇所を示すと、「私はサンフランシスコではまさに原案の通りに演説したのだ。それでは、そもそも演説する意味がなくなつた」と不満そうです。長男の「一にも」これは改悪だ。せつかくの自分の意図する所が全然通じない」と洩らしたと言いますが、鈴木は決意を知っている迫水も、再び原稿を原案に戻すことにしたのです。しかし、下村たち閣僚は知りません。施政方針演説を聞いて「あれ、どうなっているんだ」とびっくりしたと言いますが、これに飛びついたのが護国同志会の小山亮代議士でした。

長野県出身で、昭和十一年から当選三回。若い頃船員時代に労働組合活動をしたことがあり、激しい攻撃をすることで知られていました。護国同志会は二十九人と小人数ながら、「三月事件」、「十月事件」など、陸軍のクーデターを計画した橋本欣五郎大佐などもいて、陸軍の代弁役として活発な活動をしている会派です。小山は十一日の委員会で、宣戦の詔勅に「天祐ヲ保有シ」とあるのを取り上げたのです。「日本国民は天祐神助が我らの上にあると確信して、この戦いに臨んでいるにもかかわらず、戦いをすれば両国とも天罰を受けると首相が述べたのは、どういうことか。これは間違いか、勘違いか、取り消しを願いたい」。大見得を切りますが、小山の本当の狙いは、鈴木内閣が和平を考えているのではないかと、鈴木、米内の「海軍内閣」を倒すことにあつたのです。ところが鈴木は、弁の立つ人ではありません。お手元の「議会議速記録」でもお分かりのように、まあ何を言っているんだかわからないようなものでしたから、委員たちが口々に叫んで騒然となり、委員長が「暫時休憩致します」と宣言して、やっと散会になったのです。

昼すぎ、政府委員室に護国同志会の声明書ピラが配られました。鈴木は答弁を引用した後、「吾人同志ハ飽クマデモ、其ノ不忠不義ヲ追及シ、モツテ斯クノ如キ敗戦醜陋ノ徒ヲ掃滅シ、一億国民挙ゲテ必勝ノ一路ヲ邁進センコトヲ期ス」。こういった内容ですが、そこへ気になる情報が入ってきました。この声明が議会内の陸軍政府委員室で印刷されたのではないかと、言うのです。紙だって、もう簡単には手に入らなくなっていた時代です。そうだとすれば、陸軍が護国同志会の倒閣運動に加わったことになります。閣僚たちの間に緊張が走りました。

これを押さえたのは、陸軍大臣の阿南でした。阿南はこの朝、新しく編成され

た十五人の連隊長に軍旗を渡す親授式に出ている、議会の騒ぎは知らなかったのですが、陸軍省へ戻って来ると「陸軍省の一部で、阿南内閣という予想の下に閣僚の顔触れをいろいろ相談しているらしい」。こんな報告を受けて、激怒したそうです。すぐ幹部を集めて厳重注意しましたが、種村大佐は「大本營機密日誌」に「省内の少壮連中の空気を激化せしめない目的で、大臣の命により各課高級課員を集めて、プリントしたもので、議会の空気を正しくつたえ、言論の戒むべきを伝えた。これを見た大臣は、正直にそのプリントを迫水書記官長に渡し、大臣の真意を伝えたのであった」と書いています。阿南の毅然とした姿勢は、迫水たちを安心させるものでしたし、一部将校と気脈を通じて倒閣に持つて行こうとしていた護国同志会も、一遍に腰砕けとなったのです。鈴木は議場から戻って来ると、心配する人に「やっていますね。賑やかなものでした」と平然たるものです。迫水の方はそうも言っておられず、各派を回って首相答弁を取り消し、答弁をやり直すことでもうにか収めました。

しかし、戦時緊急措置法案を通すには、議会の会期を延長しなくてはなりません。十一日の夕方から臨時閣議が開かれましたが、「こんな無茶な議会は停会にした方がいい」と発言したのは、海軍出身で國務相の左近司政三中将です。米内はもともと議会召集に反対でしたし、小山から「反逆者」などと罵られてよほど腹が立っていたのか、「停会にするか、解散すべきだ」と主張し、「この意見を思い付きで言うのではない。私の意見が容れられなければ、私は私として善処する。もっとも内閣には迷惑をかけない」と言います。これには、閣僚たちも慌てました。米内が辞表を出せば、鈴木内閣は閣内不統一ということで総辞職しなければなりません。陸軍大臣の阿南は黙って聞いているだけでしたが、十二日午前一時近くになつて、「もう夜も更けたし、明日の朝までよく考えておこうじゃありませんか」と発言し、閣議は一旦解散となりました。

そして翌日の早朝、陸相秘書官が左近司の家を訪ねてきて、阿南の手紙を手渡したのです。それは鉛筆の走り書きで「昨夜の米内海相の発言は事重大と思う。若し海相が辞任することになつたら、破局を招くことになることを恐れる。私は今朝陸軍砲兵学校の卒業式に陛下に扈從して行かねばならぬので、貴下から海相の辞意を思い止まらせるよう至急尽力願いたい」。阿南の心情あふれるもので、左近司がすぐ海軍省へ行って、海兵で一年後輩の米内にその手紙を見せ慰留に努めると、「ふうむ、そうか」と言って、しばらく無言でした。米内にも、思いがけないことだったのでしよう。「陸相がこんなことを考えていてくれたのか」と呟き、「鈴木さんに、もつとしっかりして貰わなければ」と苦笑したと言います。

もし、阿南が本当に本土決戦を考えていたのなら、鈴木内閣倒閣はむしろ望むところだったはずです。左近司は「阿南が鈴木内閣の存続、即ち終戦の実現を望

んでいた証左と信じる」と話していますし、下村國務相もこう言っています。「私は、阿南陸相の鈴木総理に対する態度が実に礼節に富み、情にあふれているのを見て、往年近衛内閣時代の東条陸相が総理に対し不遜な態度を示し、閣議に出席を拒んだりしたことと対比して、深き感慨に打たれていたのであるが、あの阿南陸相の態度は、鈴木内閣の存続を念願する自ずからなる表れだったと思う」

首相秘書官の松谷誠陸軍大佐、この人は種村の前の参謀本部戦争指導班長で、サイパン陥落で当時参謀総長の東条に「早期終戦」を訴え、一時支那派遣軍参謀に飛ばされた人ですが、阿南についてこう語っています。「いずれ終戦せねばならぬという考えは根本的にあつたが、特に名譽ある終戦を望んでいた。それが戦局の推移につれ、次第に鈴木、米内、東郷と近寄つた考えになつていった。戦争継続派に自分の肚を悟らせないように注意しながら、最後に時期が来たら講和に持つて行く。この肚の中のカラクリをささず、肚芸でやつて行かねばならぬというのが、阿南さんの苦勞するところだつた」。阿南は、表向きは陸軍の強硬論を代表する役割を演じながら、陰ではその剛毅な意志で鈴木首相の終戦路線を援護していたのです。阿南は、鈴木が侍従長時代に侍従武官をしていましたから、鈴木の高男一によると、鈴木は常々「肚を割つて話できるのは阿南以外にない」と言つていたそうですし、左近司も「鈴木が表面強硬を装つていたのは、阿南陸相を閣内に留めておく必要からではなかつたか」と話しています。

ところで米内の辞意には、「鈴木さんに、もつとしっかりと貰わねば」と言つているように、鈴木首相の決断を促す考えもあつたのです。米内は五月二十九日に、軍令部総長を及川古志郎から連合艦隊長官をしていた豊田副武に替へていますが、この人事も陸軍を終戦に同意させる狙いからだつたと言われます。及川の話では「米内から参謀総長の梅津美治郎を説得するよう要望されたが、自分には自信がなかつた。そこで米内は、豊田が梅津と同郷の大分県出身であることから、こうした機微な話をするには都合がよいと考えたのだ」と言うのです。ところが鈴木の方は、相変わらず陸軍ばりの強硬論を唱えています。長男の一人は「鈴木、米内は肚と肚の話し合いの人であつた。言葉では言わぬ人であつた」と話しています。米内には鈴木の本心がなかなか掴めなかつたようです。

遅蒔きながら、二人の「終戦」への決意を結びつけたのは、内大臣の木戸でした。木戸は議会が終わるのを待つて、六月十三日、参内して来た米内にまず時局収拾案を示しました。米内も賛成しますが、「どうも、今もつて首相の考えが充分判明しないので、閣内にあつてこの方面に踏み出すことも出来ない」と嘆きます。木戸は「この際、陸海軍から切り出させるのは無理だ。政治家が悪者になるべきだ」。こう言つて、「政治家とは自分のことだ」とほのめかしたのですが、高木少将の話では、米内は「内大臣も、そこまで考へていたのか」と、この段階で辞意を撤回することにしたようです。木戸がその後で来た鈴木に話すと、「是

非やりましたよ」と言いながら、「しかし、海軍大臣は戦争を続ける気持ちは強いようだ」と言います。そこで木戸が「それはおかしな話だ。海軍大臣は総理が強いと言っている。あなたは海軍大臣が強いと言う。一体、お互いこの問題について話し合っていないのですか」。すると鈴木は頭を叩いて、「実はまだそんな話し合いをするまで行っておらんのだ」と答えたそうです。木戸は「至急に話し合ってください」と要請しましたが、日記に「憂いを同じうせられる心境を聞き安心す」と書いています。

しかし、この話はこの段階になってもなお、日本の最高指導者たちが終戦を口にすることをためらい、疑心暗鬼だったことをよく物語っています。もちろんその背景にあったのは、及川が戦後GHQ歴史課の事情聴取に「終戦を企図して居ることが陸軍の中堅層に判れば、首相でも誰でも敗戦主義者としての烙印を押され、一日も政治の指導的地位に留まることを許されない有様であった」。こう話しているように、陸軍強硬派の存在です。でも、どうだったのでしょうか。鈴木内閣が終戦内閣になるには、同じ海軍の米内の支持が絶対必要だったはずですが、鈴木は海兵十四期、米内が二十九期、年齢も一回り離れてはいましたが、お互いに信頼している間柄であり、同じ志を持っていたのですから、なぜ率直な話し合いをしなかったのか。

私が残念に思うのは、海兵で鈴木の一後輩の元首相岡田啓介が、早い時期に間に入っていたらという気がします。岡田は、回顧録に「私は今度こそ鈴木を出して、いよいよ最後の決断をして貰おうと思った」。こう書いているように、そのために娘婿の迫水を内閣書記官長として送り込んだのです。東条内閣を倒した時、米内を現役に戻して小磯内閣海相にしたのも岡田の働き掛けでした。岡田と一緒に終戦工作に奔走した戦後の首相吉田茂は、岡田を評して「狸も狸、それも国を思う大狸だ」と言っていたそうですが、まさに大狸の出番だったのに残念なことでした。そして、天皇の「みんな、誰か言い出すのを待っているようだ」。この言葉通り、言わば肚の探り合いで二か月以上も空費したことが、終戦の決断を遅らせる大きな要因になったのだと思います。

この間、天皇は相次いで深刻な報告を受けていました。参謀総長の梅津は中国大陸の状況を調べるため御前会議を欠席して大連に出張していたのですが、六月九日帰京してこう報告したのです。「支那にあるわが全勢力を以てしても、アメリカの八個師団にしか対抗出来ない状態である。もしアメリカが十個師団を支那に上陸させたら、到底勝算はない」。『昭和天皇独白録』には「梅津がこんな弱音を吐くことは初めてであった」とあります。十二日には、戦力査閲使として天皇の特命で軍需工場や特攻基地を見て来たの長谷川清海軍大將が、その実情を報告しました。それによると、一日五十本の魚雷を作っていた工場が、たった一本しか出来ない。自動車の中古エンジンを急増の小型船に装備したのが特攻兵器とし

て使われ、それ自体衰れを催すようなものののに、そんな簡単なものを操縦する特攻隊員の訓練は十分出来ていない。その他の特攻兵器も未完成品が多く、また人員の急速訓練も、急迫した戦局には到底間に合わない。

長谷川は「陛下は御髪の乱れすら見られ、何か深く心配しておられるように感じられたが、私の説明には熱心に耳を傾けられ、『そっだろう、私にもよく解る』と云う意味のお言葉を賜った」と話しています。海軍侍従武官の野田六郎大佐は翌日、天皇から長谷川の復命書を読むように言われましたが、その内容は四月から五月にかけて天皇の御差遣として九州各地の基地を回った際、司令官、参謀長から受けた威勢のいい説明とは、黒と白ほどの大きな違いでした。野田は日記に「特攻兵器の前途猶幾多困難あるを知る」と書いています。

天皇にはますます、「終戦を急がねば」の気持ちが強くなっています。木戸も十八日までに、六首脳から木戸の「時局収拾案」に同意を取り付けていましたが、問題は八日の御前会議決定、「飽く迄戦争を完遂し……」との関係をどうするかです。木戸は、それを天皇から言っただけで頂こうと考えます。つまり「終戦についてもこの際、従来の観念に囚われることなく、速やかに具体的研究を遂げ、実現に努めよ」。こう言っただけで頂こうと、鈴木首相と打ち合わせた上、最高戦争指導会議の構成員による御前会議を六月二十二日に開くことにしたのですが、この話の続きは七月に、「ポツダム会談へ向けて」というテーマで話してみたいと思います。